五歳児

平凡な一週間

堀合文子

五歳児になると、教師中心から幼児中心へ移行する。

三歳からまたは四歳児からの基礎指導の基盤の上に幼児の創造性は養われ、自由自在に幼児の活動がくりひろげられる。その生活の中で幼児は五歳児として自分の全身でぶつかり全力で活動してそれぞれ発達伸張している。

教師はその活動がより発展するように、そして幼児が十分に自発活動ができるように環境を設定したり、整備しなければならない。

一つの遊びも自分たちで考えられ、幼児間で相談してルールも作られ、次々と活動していく。教師が入る余地がない時もあり、むしろ教師を友だちの一員として呼び入れてくれる。

友だち相互間の関係が密になればなるほど、この状態は強く、また活動も日をおって活発になり、遊具を使い、素材を使って自由自在に経験して過ごしている。

× × × × ×

月曜日（十一月十三日）

男子のグループの一員がなんとなく友だちの来るのを待って、二、三人ふえると途端に部屋から姿を消し、遊戯室で宇宙ごっこが始まる。次のグループは庭へまりを持って出かけてサッカーが始まる。残る三、四人はままごと道具をせっせと庭にはこび、レストラン。これには女子も自然とまじる。女子はピアノを弾くもの、空箱で制作するもの、本をよむもの、縄とびをするもの、サッカーに入るもの、遊戯室の片隅へ陣どって先着の男子のグループの内助の功をしている。制作には男子も二、三人混ざり、黙々として自分のイメージに向かって創造している。

教師は各グループごとにその状態や活動をそっとみて歩く。そのうち〝先生サッカー入って、たりないんだから〟と、欠員補助のために呼ばれる。教師は制作の人たちに、より一歩前進するためにとのぞくが、自分たちは自分たちの目的のために全身全力。耳をかたむけるどころでなく自分は自分の力で作りあげている、〝先生、ここ開くようにしたいんだけど〟と空箱や紙類ではとても無理難題を持って来る。自分のイメージが現実におえなくな

ると教師のところへ持って来る。〝そうね、これはむずかしいわね。どうしたらいいかしら〟幼児と共に考える。〝ほら、よくあるでしょう。ここがすーっと開いて自然に閉まるような。そして鍵もかかって〟〝そうね。どうしたらいいかしら〟教師は何とかこの幼児の考えを実現できる範囲で実現してやりたいといっしょうけんめい考える。〝ここのところにセロテープを裏表からはって、ゴムをここにつけ開けたらのびて、またしめると元にもどらないかしら〟〝そうだ、じゃあやってみよう〟

〝先生、パパのおたんじょう日だからカフス釦をつくりたいの〟これまた難題。〝まあいい考えね〟〝何か石のようなのない〟〝そうね、じゃあお庭へいってきれいな石をさがしていらっしゃいよ〟途端に庭へとびだしていった。

〝そうだ、サッカーに呼ばれているんだった〟とあわてて庭へ。靴を取りかえていると、〝先生、おいしいケーキができたの、たべにきて〟〝あら、おいしそう〟砂場のへりに砂製のケーキがいろいろの飾りをつけておいてあり、その前に積木の椅子が一つちゃんとおいてある。私の出てくるのを待っていたごとく用意されている。〝ではちょっといただいてから〟と積木の椅子にすわりケーキをごちそうになる。〝まあおいしいこと。いい味ですわ〟コップに茶色の泡の立った水を入れてきて〝これコーヒーです。どうぞ〟〝どうもありがとうございます〟

三歳の時からこの会話はやってきた。しかしその会話の中にも、ごちそうの中にも五歳のにおいがする。ケーキの形、ナイフ、ホーク、椅子など。きたなく泥になったおしゃもじの切れ端や積木の割のこりがみなそのものになって生かして使われている。五歳児としてあたりまえのことだが教師として何かうれしい。

やっとサッカーに入れてもらう。自分たちのルールがあるらしい。ラインから出てしまった。キャプテンが黙々としてまりを中心におき二人を呼びよせる。また出た。〝○○ちゃん外〟というとラインの外へでてなげようとする。〝ちがうちがう、上からだよ〟いわれるままに頭の上から両手でまりをなげる。またそこからはじまる。〝まって、△△ちゃん、ここに来てけるの〟〝ポーン〟〝かった、かった、三対一〟一点の人はしょぼん。三点の人は両手をあげとびあがってよろこんでいる。何が何だかルールがさっぱりわからないが、みんなを見ながらついていく。どうも負けているらしいので一つ入れなくてはとがんばる。が、なかなか防御力も強く手ごわい。いつの間にか教師も夢中になってしまう。相手が幼児であることを一瞬忘れてしまい、自分でもにやにや。

〝先生〟〝あとでちょっと来てね〟レストランの人がよびに来る。〝先生―〟〝××ちゃんがころんじゃった〟〝血が出てるよ〟それ大変といく。たいしたことはないが、赤チンキをつけておく。

部屋の製作はだいぶできていて、マジックで一しょうけんめい塗っている。遊戯室の人は部屋にもどりブロックで飛行機をつくっている。二人ばかりステレオの前でレコードにききいっている。女の人が側にある鈴を音楽にあわせてふっている。それぞれたのしそう。

ふと時計をみると十一時二十分。今日のお当番に〝おべんとうだからかたづけましょうとみんなに教えてあげてね〟とたのむ。〝先生ここまでできたけどまた明日やる〟〝僕もうできたけどどこへおいておく〟〝スチームの上においておきましょう〟〝紙屑やお道具をよくかたづけてね〟

遊戯室の方はとのぞきにいくと、大積木で勇壮に宇宙基地ができていて、もうかたづけ始めている。それぞれかたづけの活動でそれぞれの場で活動し、協力がはじまる。箒ではこうとすると〝先生かして〟と取りあげられる。友だち同士語りながら誰いうとなく作業の分担が自然とでき、みるみる中に部屋がきれいに整頓されてくる。〝あ、まだあの組木の棒がきたないな〟と心で思う瞬間、だれかの手がその箱にさわり、あけられて整頓にかかると、自然と、二、三人が手伝いに集まる。ふしぎふしぎ、幼児の世界のきまり、協力援助、実行が、誰の指示もうけず自然とスムーズに行なわれていく。

教師がお盆とふきんと用意するとお当番がきてふきだし、他の者はそれをくばる。くばりおわるとおべんとうを取りにいき、おべんとうの用意。

おべんとう

おべんとうがおわると午前の続きをするもの。また新しいあそびをするもの。おべんとうをいただきながら友だちとあそびの相談をしたりしている。先にすんだ人が〝ジャングルでまってるわ〟〝どこでまちあわせ〟〝鉄棒ね〟〝じゃあいくわね〟こんな会話は何か錯覚をおこしてしまう。教師は自分の年も忘れ、青年たちと生活しているようだ。

もちろん体操のレコードがなるまではまた、たのしい活動。午前の制作をたんねんにやりあげている人もいる。また改めて作りだす人もいる。

体操　帰園

火曜日　水曜日　木曜日

ほとんど同じことのくりかえしだ。大きいグループはほとんど動かない。ただ個人個人は常に同じグループにいるとは限らない。ある人は製作に入ったり、サッカーに入ったり、砂場へいったり、ほとんど交流している。

金曜日（十一月十七日）

今日は遊戯室が使用できる日だからゆうぎをしようと教師の計画。

幼児の活動は依然として交流しながら同じ活動がくりかえされている。教師の計画の中の時間はきた。制作の人たちは夢中で制作、レストランも必要に応じてメニューや、看板や、ごちそうを交代してつくりにくる。その他のグループも今日あたりは交流している。サッカー選手のために砂場の休憩所ができたりほほえましい。それぞれのグループでそれぞれくふうし考えて活動経験している。今日、何もそれをこわして集めて遊戯室へつれてゆかなくてもよいとの判断で今日は中止。

× × × × ×

一週間とりあげても五歳児の活動は続く。いや、二週間、三週間と続く。その活動が教師の計画したものより、より収獲の多い活動が実現されている。一人の落伍者もなく。これが五歳児なのだ。平凡な、何もなされていないような日々だが、その中で幼児が考え、くふうし創り出しているその活動は偉大であり大切なカリキュラムなのだ。私は五歳児と生活を共にしながら、現在共にある五歳児をみながら、前に経験した五歳児と考えあわせながら次のことを今年は新たに確認したようだ。

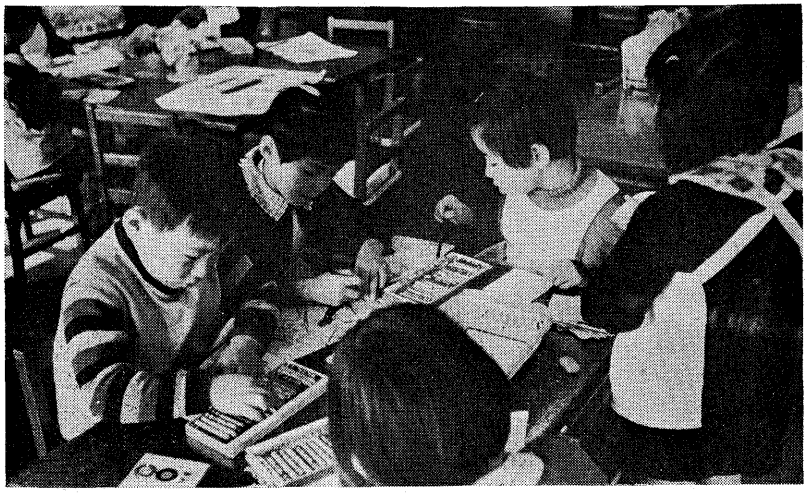
○五歳児は、グループの中でも個人でも幼児の活動を十分発揮できるように、教師は環境設定しなければならない。

○活動できるためには、三歳児、四歳児の間の指導ということが大変大切で、これがすべて基盤になっている。

○三歳、四歳での基盤の上にたって五歳児は自分自身の活動をつくりあげている。

○教師が計画をたて、誘導していくものは、小さい計画も、大き

い計画（お店やごっこ、動物園ごっこ、その他）も五歳児は上手にもやってくれるが、それは三歳、四歳で教師が援助しながら大いにやるべきで、五歳児はむしろ教師の計画に誘導しないで、活動としては淡いし、安易だが、幼児からでた自発的な活動を育て誘導することを努力したほうがよい。



○その自発活動となってでてくるそのものを五歳児までに育て指導しておく必要がある。

○もちろん、五歳児の活動となってあらわれたものは、個人個人をよりよく前進伸張するよう教師は指導しなければならない。

こんなことを、生活している中に考えたので、五歳児として二学期も三学期も五歳児の能力と考えあわせ数週間かけての大きい計画また、小さい計画をもっていたが、十一月半ばすぎに私はその計画をさらりすてた。そして幼児の活動、毎日くり返される平凡な幼児らしい経験を大切にし、その都度、その個人によって指導した。

外見は、大きい計画、五歳児らしい計画は何一つしなかったようで、常に遊びくらしたとみえるだろうが、五歳児の三月、卒業していく幼児をみて、教師が計画しなかったこともちゃんとできる、むしろ計画して経験させた時より豊かな経験と能力を持っているようだ。

幼児と教師が常に平凡な生活をおくる中にポイントを握り、幼児を指導し伸張していくのが五歳児の教師ではないか。三歳児は別としても四歳児、五歳児とのカリキュラムも自然と今までとは変化するのではないかなと自分の頭の中を通っていく。五歳児の一週間は、どこの一週間も外観からは同じような一週間だし、活動だが、その中で、深さのふかいふかい経験を幼児はしている。そしてこの一週間より次の一週間、次の一週間と伸張している。